

研究紀要

(第50集)

研究主題 自立し協同する力を育む教育
ーコミュニケーション力を基盤としてー (2年次)

目次

巻頭言	学校長
I. 総論 研究の経緯と概要 研究部	1
II. 各教科等の取り組み	
1. 対話を通して表現力を身につける指導の工夫 国語科：和田雅博・今西千景・平山ちさと	8
2. 質の高い学力を育てるための社会科授業の工夫 ～言語活動の充実を通して～ 社会科：陰山 健・飯島知明・吉田昂平	20
3. 数学的な思考力を育む授業の創造 ～言語活動を効果的に行うための学習課題の開発～ 数学科：山戸正啓・谷 直樹・松井悠歌・上原昭三	26
4. 表現活動を通じた科学的思考力・探究力の育成 ～言語活動を軸とした理科学習の追求～ 理科：川合麻衣子・辻本堅二・藤井宏明・平田豊誠	36
5. 音楽科における言語活動の充実 ～共通事項の指導を通して～ 音楽科：興梠 徹	48
6. 表現力を強化する実践術としての創造活動 美術科：中馬真里亜	52
7. 豊かな感性を育てるスポーツライフの基礎をめざして ～コミュニケーションを基盤に～ 保健体育科：田中哲也・小林佐知江・大垣直也	64
8. 工夫し創造する能力と協同する態度の育成 ～コミュニケーション力を基盤として～ 技術・家庭科：高河原 健・宇都宮ふみ	72
9. 4技能を総合的に育成する英語学習の指導 ～協同して取り組む活動を活かして～ 英語科：俵石正雄・板野麻由美・内田航介・山形 傑・David Astorga	80
10. 安全で安心して生活できる社会の実現を目指して 総合的な学習の時間：陰山 健・辻本堅二	86
11. 附中タイムの取り組み	96

2011

大阪教育大学附属池田中学校

巻 頭 言

「自立し協同する力を育む教育」 ～コミュニケーション力を基盤として～

子どもたちの現状をふまえ、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視する新学習指導要領が小学校では今年度入学生から実施されることとなりました。中学校、および高校の数学と理科では平成 24 年度、高等学校のその他の教科も平成 25 年度入学生から実施されます。

本校には附属学校として教育実習校、新しい教育に取り組む研究・実践校としての使命があり、創立以来、その時々様々な教育課題に対する研究に取り組んでまいりました。

2009 年度から同一キャンパス内（池田地区）にある大阪教育大学附属池田小学校、同附属池田中学校および同附属高等学校池田校舎は、3 校種と大学が連携した共同研究に取り組むため、池田地区共同研究協議会を発足させました。そして共通テーマ「自立し協同する力を育む教育～コミュニケーション力を基盤として～」のもと、「生きる力」をもった社会に貢献できる人間育成を目指して 2010 年度から共同研究に取り組んでいます。本校では、これまでから副題であるコミュニケーション力の土台となる言語活動を重視した学習指導を各教科で実践してまいりました。

2 年次に当たる今年度は、知の創造と力の開発、心の涵養をなす授業において、児童、生徒の豊かな言語活動の展開が大切であるとの考えで、研究に取り組んで参りました。また、今年度は 2 月 24 日に 3 校種がはじめて同日開催の形で研究発表会を行い、小・中・高が 2 年間連携して取り組んだ研究成果を発表しました。

本研究紀要は、上記研究発表会で発表した研究成果を基にまとめたものです。つきましては、皆さまからの忌憚ないご叱正とご指導を賜り、さらに研究を深めて参りたいと考えております。

平成 24 年 3 月

大阪教育大学附属池田中学校
校 長 山 川 正 信

I . 総論

—研究の経緯と概要—

自立し協同する力を育む教育 ～コミュニケーション力を基盤として～（2年次）

研究部

1. 研究の経緯

(1) 共同研究として

グローバル化の進む現代社会において求められる人材はどのようなものなのか。その際、OECDによりキーコンピテンシーとしてまとめられたものが参考となる。

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
- ② 多様な社会グループにおける人間関係形成能力
- ③ 自律的に行動する能力

つまり自立した個人が協同的・自律的に活動すること、その際には相互作用的に言語を用いる力が重要であることが指摘されている。

これらは本校が平成7年度より推進してきた国際理解教育においてその育成を目指している「グローバルマインド」と重なり合う。これは右のような11の要素から成るが、その中で特に重要視しているのが「個の確立」と「他者との相互啓発を通して自分を見つめる姿勢」である。それを柱にグローバルマインドの要素を端的に表わしたものが「自立し協同する力」である。

しかし当然ながら「自立し協同する力」は中学校3年間だけの教育では、十分に達成することはできない。子どもたちが小学校・中学校・高校と成長していく中で、それぞれの発達段階に応じた教育を行ってこそ達成できよう。そのため昨年度より小中高の共同研究として、「自立し協同する力を育む教育 ～コミュニケーション力を基盤として～」を掲げ取り組むことにした。

- ・ 個の確立
- ・ 他者との相互啓発を通して自分を見つめる姿勢
- ・ 他者との対立を乗り越えた建設的な妥協の姿勢
- ・ 自身の価値を適切に伝えるための表現能力
- ・ 自文化、異文化への好奇心
- ・ 広い視野、多様な見方・考え方、柔軟な思考
- ・ 人、モノ、コトとのかかわりを意識する生活スタイル
- ・ 現状及び未来の地球的な課題に関心を持ち実践できる行動スタイル
- ・ 生命尊重、人権尊重の精神
- ・ 他者との共同作業を通じての他者発見、自己発見
- ・ 個の確立に根ざした連帯の意識

図1 グローバルマインドの要素

(2) 1年次の研究より

来年度4月から中学校において、いよいよ新学習指導要領が全面実施される。そこでは「生きる力」の育成のために確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成が求められている。そのための手立てとして基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、学習意欲の向上などが重要視されており、そのために各教科共通した授業改善のための視点として、言語活動の充実が挙げられている。この場合の言語活動とは言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーション双方を含む広い意味での活動である。これにより思考力・判断力・表現力を高め、コミュニ

ケーション力の向上を通じて「生きる力」を育むことが求められているのである。なおここで言う「コミュニケーション力」については、昨年度の定義である「自分の思いや考え、体験を様々な他者に伝わるような『ことば』で表現し、また相手の思いや考え、体験を自らのそれと重ね合わせて受容し、相互理解に向けた営みができる力」と捉えることとする。

言語活動に関して、昨年度はテキスト（作品）との対話、自己との対話、他者との対話の三つに分け、取り組みを進めた。テキスト（作品）との対話とは読解や論述、表現活動など、自己との対話とは思考、判断に関わる活動、そして他者との対話とは発表や討論などが主となる。各教科でこうした活動を効果的に組み合わせていくことで、目指す教科学力の定着を図ってきた。

そして個々の言語活動を行う際に重要視したのが振り返り作業である。それは他者に向かって表出したものをもう一度自己に取り込む作業であり、それを経ることによって学習した事柄がより内面化し、思考した事柄が再構築され深まっていくことが期待されるからである。その一つが話し言葉による振り返り（再声化）であり、もう一つが書き言葉による振り返り（再言語化）である。こうした振り返り作業を伴った言語活動により、思考力・判断力・表現力等の学力を身につけることに一定の成果が見られた。今後もこの反復及び洗練が必要である。

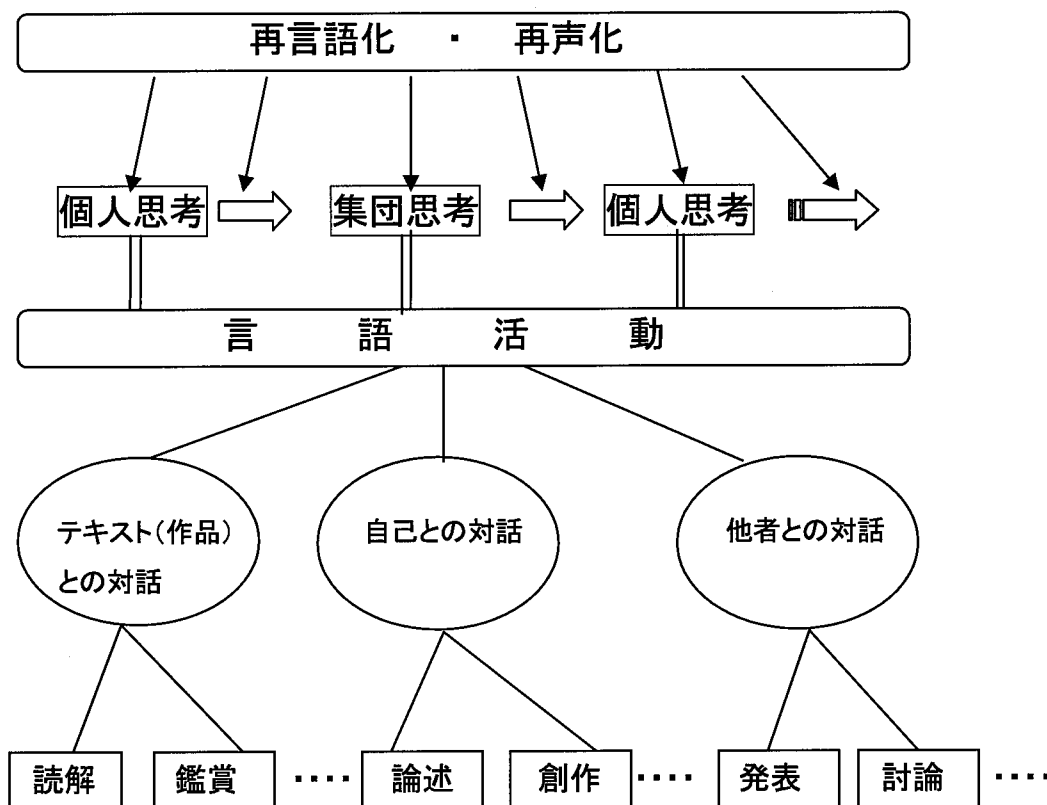


図2 言語活動の構造図

2. 本年度の研究

(1) 共同研究として

研究主題の達成に向けて取り組む中で、1年次に課題となって浮かび上がった点が、小中高それぞれの校種間での理解不足から学習活動、特に言語活動の系統性が不明瞭であり、その非効率性から学習効果が必ずしも上がらなかったことである。そのため、言語活動の系統性を明らかにするための基準づくりが求められる。具体的には小中高それぞれの教科・領域において、単元もしくは題材ごとに図3のような言語活動のマトリクスを作成し、その蓄積・比較により言語活動の校種間の系統性の明確化を図ってゆく。そして12年間の中で系統性を持ったカリキュラムの軸としての言語活動の位置付けにより、研究主題の達成を目指す。

図3 言語活動のマトリクス例（中学校）

国語科

コミュニケーション 単元	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
	話す・聞くこと	書くこと	読むこと	見る
学校ホームページを企画しよう	<ul style="list-style-type: none"> ホームページ作成のテーマと方針を決めるための話し合い活動 ホームページ企画書を作るための話し合い活動 	テーマにふさわしい記事を書く活動	資料を比較・検討し、特徴を読み取る活動	既存のホームページを見て様々な効果を感じ取る活動

理科

コミュニケーション 単元	言語的コミュニケーション		非言語的コミュニケーション
	根拠に基づいた思考・表現	自然の事物・現象に関する言語の使用	数値やモデルを用いた表現
雲画像から気圧配置を考える	なぜその位置に低気圧や前線があると思ったのか自分の考えを述べる	気象現象に関することばを用いて説明する	前線・低気圧の位置を雲画像に記入する

美術科

コミュニケーション 単元	言語的コミュニケーション				非言語的コミュニケーション			
	感受	伝達	技術	構想	色彩表現	有形表現	無形表現	代替表現
中学フォト	感動した事柄に着目する活動	自他の視点の共通・差異に着目する活動	デジタルカメラの技法に着目する活動	最適な構図に着目する活動	色合いに着目する活動	ポーズや配置で表わすことに着目する活動	時間や空間に着目する活動	時間を写真に置き換える活動

保健体育科

単元	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
	課題を発見する	課題解決を考える	集団的技能	個人技能・集団的技能
チーム力向上 バスケットボール	グループの課題を発見し、他者に理解できるように自分の言葉で説明する活動	グループの課題を解決するための手立てを考え、他者に理解できるように説明し、グループ内での意見をまとめる活動	グループ内での練習、試合における連携動作のコーチング活動	グループや個人で考えたり、決めた動きを実践する活動

(2) 本校の研究

① 個人思考と集団思考

1年次の研究を進める中で重要であると思われた活動が「個人思考」と「集団思考」である。主としてテキスト（作品）との対話、自己との対話に代表される個人思考と、他者との対話となる集団思考を大きな視点として授業づくりを進めてきた。その中で「個人思考 → 集団思考」、「集団思考 → 個人思考」のサイクルを繰り返すことで思考力・判断力、そしてその結果としての表現力の深まりが見られた。個人で思考・判断した事柄の交流等を通じて集団思考を導き出す。集団思考を受けて再度個人思考で自分の考えを再構築する。それが求められる学力の育成につながる。個人思考は個々の生徒の課題に対する取り組みが中心となるが、集団思考は、本校が2007～2009年度に研究主題「個々の生徒の課題・実態に合わせたきめ細かな指導の実践」の下で取り組んだ課題学習のうち、発展課題学習で見られたオープンエンド型の発表や討論、論述のような主体的表現活動を中心とした学習が中心となる。そしてその課題設定の際には単元別評価も一定の効果があると考えられた。

以上より、個人思考と集団思考のより良い内容や手法、形態の検討を重ねていく。

② 言語活動の整理・分類

中学校において図2のような視点で各教科において言語活動に取り組んできたが、そこでは共通、重複する部分や相互に依存している部分も多々見られた。効率的・効果的な学習を進めていくためには、そうした言語活動の整理・分類・統合が求められる。具体的には各教科において取り組まれている言語活動を抜き出し、整理・分類を行う。そうした作業により、どの教科がどのような言語活動を行い、相互に補完し合えるのか、その整理・統合を進めてゆくことが可能となる。そしてその効果的な組み合わせや活用を取り入れた授業展開を目指す。例えば、それぞれの教科でより力を入れるべきものや、連携して教科横断的に取り組むべきもの、また教科の枠にとらわれずにその育成をはかることが求められるもの等を整理していく。そのために先述のマトリクス作成において抜き出された言語活動を、今度は教科横断的に捉えていくこととなる。

教科等	言語活動例	
	言語的コミュニケーション	非言語的コミュニケーション
国語	話す・聞くこと 書くこと 読むこと	見る
社会	位置付け・分類 意味づけ・理由・因果	関連づけ・関連性
数学	日常言語 数学的言語	操作・体験活動
理科	根拠に基づいた思考・表現 自然の事物・現象に関する言語の使用	数値やモデルを用いた表現
音楽	音や音楽によるコミュニケーションを 図るための思考・判断	音や音楽によるコミュニケーション
美術	感受 伝達 技術 構想	色彩表現 有形表現 無形表現 代替表現
保健体育	課題を発見する 課題解決を考える 集団的技能	個人技能・集団的技能
技術・家庭	思考・判断 表現	調査・集約整理
英語	インプット 深化 アウトプット	ボディランゲージ
総合的な学習	読む 書く 話し合う	行動する

図4 各教科等における言語活動例

各教科における言語活動においてその活動を示す表現は違えど、内容において相互に重なる部分や共有している部分はいくつも見受けられる。例えば、物事をわかるように他者に伝える活動、何らかの情報を読み取る活動、ある観点から物事の価値判断をする活動などがそうである。これらを整理していくためには、各教科の言語活動の中身を活動レベルで捉えていく必要がある。そうした各教科の要素的な活動を抜粋すると、主に次のようなものが挙げられる。

言語的 コミュニケーション	説明 構想	解釈 比較	記録	評価	発表	把握	伝達	表現
非言語的 コミュニケーション	表現 行動	想像 共感	創造	描写	調査	集約	製作	制作

図5 要素的な言語活動例

それぞれの要素的な言語活動の中には言語的コミュニケーション・非言語的コミュニケーション双方にまたがるものもあり、教科における言語活動の検討と共に、その整理・分類・統合が必要である。

こうした要素的な言語活動に特化した学習は各教科等における言語活動の土台となり、ひいては思考力・判断力・表現力の向上につながることを期待される。本校において昨年度より実施している「附中タイム」が、そうした活動として位置づけられる。(96頁：附中タイムの取り組み 参照)

このように縦の系統性を強く意識した言語活動のマトリクス作成と、教科横断的なその整理・分類・統合により、効果的な言語活動の配置を行うことによって、本当の意味での言語活動の充実につながり、主題の達成が期待される。

3. 成果と課題

個人思考と集団思考のサイクルを繰り返し、振り返りを取り入れた授業づくりにより、個々の思考が内面化し、思考力・判断力・表現力の育成を中心とした教科学力に一定の深まりが見られた。そしてマトリクス作成を通してコミュニケーションを意識した授業の組み立てに重点が置かれ、その結果言語活動が深まり、各教科・領域において系統性を持たせた授業展開が容易になった。

一方、今後の課題としては「評価」である。

各教科共、評価規準を作成し蓄積しているが、マトリクス作成において取り上げた言語活動をどのように評価していくのかについての規準作り、そしてその評価のための手立てを確立していく必要がある。特に発達段階に応じて系統性を持たせたカリキュラム作成を進めていく中で、評価においても質的量的差異を含めた小中高共通の観点を検討していかなければならない。

以上を踏まえながら、次年度もより効果的な学習指導を目指して研究を進めていきたい。